

## 《論 文》

## ことばの力と可能性：文学とプロパガンダの境界

— W. B. イェイツの “Easter 1916” と  
バラッド “The Men of Easter Week” —

海老澤 邦 江\*

## I 「沈黙することば」

語学教育に携わっていると、教える側が頭を悩ます問題で明らかなことがいくつかある。まず、学習者側の問題——予習・復習をしない、つまり学習意欲がないこと。次に教授法は様々あるが、学習効果が目に見えて上がるような、これといった方法が見つからないこと。この2点についてだけでも、さらに掘り下げれば、芋づる式に次々と課題が出てくる。多くの課題を前にして、取り敢えず解消できるものから対策を考え実行したとしても、さらに次の新たな問題が現れる。「言語はコミュニケーションにとって重要」であるという理由を以て、学習者に学習を促している。さらに外国語は「コミュニケーションの手段」にすぎないのだから、難しく考えることはない、肩の力を抜いて取り組めばよいと説得する。若い学習者たちは、理屈では「もっともだ、確かにそうだ」と理解しているようなのだが、実際にはそう感じていない。こうした中で、多くの学習者たちの間ではことば嫌いが加速がしているように思える。

最近考えるようになってきていることは、彼らにとって「ことば」に自らの感性や意識を表出し、個性を発揮できる汎用的働きがあることを忘れていないのではないか。違う側面から言うと、発言する——言語表現——することは、彼らにとって恐ろ

しいものになっているのではないかということである。例えば、いじめ問題の発端には、ある特定の子供を傷つける発言がある。子供たちは他人を傷つけることばを言ってはいけないと教えられ、多くの子供たちはそれに従い不用意な発言を控える。沈黙することで、他人も自分も傷つかないで済むのではないかと無意識に学び取り、それが日常の振る舞いとして身につけてしまった側面があるのではないかと懸念するのである。

飛躍した言い方になるが、言語は人間だけが持つ巧妙で優れたコミュニケーション能力である。さらに言語表現の可能性は計り知れないほどの深さを持っている。そもそも言語表現には、驚きや楽しみなど知的刺激に満ちた効果や作用があるはずだ。音声言語だけでなく、文字を使用して意思疎通を図る。必要最低限の情報を活字化するだけでなく、自らの心情や感情、思想にしても、私たちの意識の表出をよりよく言語表現したいと望む。そうしたとき、文体の有効性もしくは妥当性、あるいは言語の可能性を追求したいという欲求が、私たちに突き動かしているとしばしば思う。私たちは、ある意図を持って文章を綴る。一方で、その意図とは無関係に発することばに思わず共感を覚えることがある。昨年秋、朝日新聞に連載されている「折々のことば」の欄に「おかわりい！」ということばがあった。選者の鷺田清一氏の孫は、好物をおかわりするとき、「おかわりい！」と言うそうだ。その孫を連れて観劇にいったところ、終わったところでこの子が、そのことばを思わず

\* 江戸川大学 情報文化学科教授、語学教育研究所長  
英詩・文化比較

叫んだとのこと。この文脈を理解して初めてこのことばの感覚的感動を共有できるのだが、意表を突く衝撃が忘れられないでいた。そして、1月29日付朝刊の文化・文芸欄に鷺田氏と高橋源一郎氏との対談記事を見つけた。高橋氏も「おかわりい！」には大変感動したらしい。高橋氏は、続けて言う〈言葉は単独でそこにあるわけじゃなく、受け手と出し手がいて初めてコミュニケーションが生まれ新しい意味が付け加わる〉。それに応えて鷺田氏は〈コンテクスト（文脈）は無限にある。論壇時評は、引用する論文やエッセーのつなげ方が意外でぞくぞくします。全然違うコンテクストから言葉の感触も全然違うものをひっばってくるでしょう〉と言語の可能性を語った上で、ことばの危うさと大切さに触れ〈言葉の意味を理解することと、それに心底納得できるということのズレって常にあると思うんですよ。納得ということは、本当に体に染みこんでくることなんですけど、それが常に正しいとは限らないことが、言葉の危ういところかなと〉、〈納得し、理解できる言葉ばかりでなく、理解できないところへ連れてってくれる言葉が大事だと思います〉<sup>(1)</sup>と述べている。

## II 詩歌の可能性

鷺田氏がいう〈理解できないところへ連れてってくれる言葉〉の典型のひとつとして、詩歌の表現を挙げられよう。現在の言語教育の中で、日本語・英語の詩歌は遠ざけられているようだ。その理由は定かではないが、おそらく「指導するのがむづかしい」「子供の理解が及ばない」、「受験向きではないから」というものであろうか。しかしながら、詩歌からことばの楽しさ、美しさ、驚きの感動を得ることは多い。

英語学習を始めるときには、マザー・ゲースの言葉遊びや音声の面白さに夢中になるであろう。日本人の多くが耳にしたところがある「ロンドン橋」にしても、強弱の抑揚を主とした軽快なリズムに加え、ロンドン橋の素材が建て替えられる度に变化してゆく不思議。そうした謎からも英国で初めて架けられた橋のエピソード、また時代を反映す

る文化史的興味などを語ることはいくらでもできるし、異文化理解の一端にもつながるであろう。また、国語学習においても、三好達治の〈蟻が／蝶の羽を引いて行く／あゝ／ヨットのようだ〉という短詩はすでに古典的なかもしれないが、イメージの面白さ、空間の広がりなどを楽しめる作品である。自然環境を注意深く観察していれば、食物連鎖のひとつの博物学的光景であり、蝶の羽をヨットの帆に見立てる比喩の卓抜さ、さらには地上から海上へと世界が転換する面白さをこの短詩から読み取るのは容易であろう。特に感受性に溢れる時期の若い学習者にとっては、柔軟な言語表現のあり方を知ることは大切だと思う。

日本の現代詩には、浪漫的抒情詩、モダニズム詩、プロレタリア詩、イマジズム詩など、基本的には欧米の思潮からの影響を受け、そのスタイルを日本流に受容してきた歴史がある。しかし現在では、西欧からの洗礼が終わり、日本の現代詩のあり方が多様化している。ことばのシャレ（地口）を使いながらも、現代人の心に寄り添うように感じられる詩がある。一部を引いてみる。

汚れちまった悲しみに  
 という詩があったけれど  
 悲しみというしみは  
 いつから付いているのでしょうか

あなたの憎しみ、しみ抜きいたします  
 あなたの苦しみ、しみ抜きいたします  
 あなたの悲しみ、しみ抜きいたします

しみ抜き剤はこころをこめた  
 わたしのやさしいうそです

わたしのそばにいてください  
 あなたのそばにいてあげるから

おしゃべりなんて嫌いだから  
 だからいっしょにいきましょう

（「しみ抜き屋のうそ」<sup>(2)</sup>）

この作品は秋亜綺羅氏によるものだ。秋氏には『透明海岸から鳥の島まで』『ひよこの空想力飛行ゲーム』（2冊とも思潮社）などの詩集があり、2012年に丸山豊記念現代詩賞を受賞、現在仙台市に在住している詩人である。

冒頭の詩行は、中原中也の「汚れちゃった悲しみに…」を引用している。この有名な詩を読んだことのある者は、中也の遣り処の無い〈悲しみ〉に、多かれ少なかれ、深い共感を覚えたのではないだろうか。秋氏の詩では、〈しみ〉が着くのは（憎）〈苦〉〈悲〉といった人間に不幸や孤独を感じさせる「汚れた感情」である。〈しみ〉＝〈紙魚〉という連想からの地口、それでは「不幸にも汚れてしまった〈しみ〉を染み抜きしましょう」という発想に転換する。中也の詩には現れなかった救済の手なのだろうと思っていると、実は〈しみ抜き剤はこころをこめた／わたしのやさしいうそです〉と肩すかしの意表を突く詩行へと続く。私は、ここに現代的な誠実なやさしさを感じるのである。人の心に染みついた憎しみ、苦しみ、悲しみなどの感情は、いとも簡単に拭い去れるものではないことを詩人は知っている。それでも相手を癒すために〈しみ抜きいたします〉と嘘をつく。〈わたしのそばにいてください／あなたのそばにいてあげるから〉と〈わたし〉が懇願するのは、傍らにすることが相手に重荷にならないためのさりげないやさしさ、心遣いである。傷ついた相手に〈わたし〉ができる精一杯のことは、ただ傍らに一緒にいることだけであり、自分の無力さを自覚しながらも、存在すること、相手に寄り添うことの大切さを示唆しているのではないだろうか。私たちは、しばしば饒舌によって他人を理解しようとするが、この作品に描かれる人間像は、理屈や理論、ことばのやり取りを拒む現代人のあり様を示している。あるいは、誠実なことばに不実を見抜いてしまう、不実に満ち溢れた現実だからこそ逆に誠実を強く求めるとも言えるだろうか。饒舌をかかずよりも、傍らでただ存在することが相手へのいたわりであり、そのいたわりが、時として温かさを通わせる人間関係を回復してゆくのかもかもしれないと思う。私たちはこうしたいたわり方

を忘れていたことをこの作品から気づかされるのではないか。この作品は言語表現の多様性、ことばの作用の面白さや驚きだけでなく、私たちが忘却していたものを思い出させてくれる詩である。それは、私たちの日常生活においても生きる指針を示すヒントにもなるであろうし、多くの若い世代にもこうした詩的表現を広く知ってほしいと思う。

### III 詩の方位

英詩において、「詩は何のためにあるか」という議論は、有名なものではフィリップ・シドニー（Philip Sydney, 1554-1586）の『詩の弁護』（*Defense of Poetry*）に遡り、ロマン派のシェリー（Percy Bysshe Shelley, 1792-1822）の『詩の擁護』（*A Defense of Poetry*）、モダニズムではT. S. エリオット（Thomas Sterns Eliot, 1888-1965）にいたるまで、400年以上も同様のテーマの議論が続いている。「詩は無用」という考え方は、プラトンが『国家論』で述べた、いわゆる「詩人追放論」にまで遡るのだろう。要約すると「現実はいデア界の影に過ぎず、イデアを模倣しているだけなのである。詩を含め文学もまた現実界のものなので、イデアを語っているのではなく模倣に過ぎない。また、人間の魂の弱い部分、劣った部分に働きかけ害をなすからだ」ということになろうか。そもそも世界観のとらえ方が現在とは全く異なるので、プラトンの論を丸ごと信じる者は今ではそう多くないと思う。だが、留意したいのは、多くの人間の魂を惑わせるとプラトンが考えた裏側には、詩が人々に歓迎され受け入れられていた事実があること、その影響が強く広範に及んだ事実である。特に後者の場合、プラトンの時代と変わらない懸念が現在でも持たれるのであろう。

現代においても、言論の自由を尊ぶ一方で、国家や共同体の秩序やモラルが危うくなれば言論統制が行われる。日本の文壇史を繙いても、口語自由詩、プロレタリア詩などはその実例であろう。海外の作品についても、ジョイスの『ユリシーズ』、ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』、サルマン・

ラシュディの『悪魔の詩』など枚挙に暇はない。その理由は、道徳の見地から政治信条や思想、宗教の信仰に到るまで様々である。そして多くの書物は、時の経過の中で、体制や主義主張の変化に応じて許容の枠が広げられ、なぜ悪書と判断されたかもわからなくなることも多い。敢えていうならば、やはりことばには、歓びと脅威を併せ持った力があるということなのだろうか。

W. B. イェイツ (William Butler Yeats, 1865-1939) は、「歓びと脅威」の境界線上で葛藤しながらもことばの力を詩に昇華させることに腐心した詩人であろう。イェイツは、普遍的な意味と価値を備える詩を生み出すことを生涯の目的とし、ホメロスの叙事詩の普遍性を手本としていたといってよい。19世紀末から20世紀初頭にかけてのヨーロッパは、20世紀後半の世界地図を準備する前段階の時代にあり、戦いの連続に見舞われた事実は周知のことである。アイルランドは特に独立問題を中心に様々な軋轢を経験する。イェイツは、書きとめるかのように詩・戯曲にその時代性を反映させ、ホメロスに倣い普遍性を持つ文学を志向する。彼にとって「普遍性を持つ」という意味は、必ずしも万民に受け入れられるという意味を持たない。大衆の心を動かす文学には、徒らに民衆の扇動目的で著されたものが含まれている事実、その危険性を知っていたからである。

ここで先述した「詩とは何か」というテーマに戻りたい。それを論じる根拠として、形而上詩人ならびに T. S. エリオット研究に優れ、自身も詩人であった星野徹 (1925-2007)<sup>③</sup> の詩論を引きながら、「詩」とそうでないものを検討してみよう。星野の遺稿集『薔薇水その他』のページを繰ってみよう。『白亜紀』143号にもこの著書について拙論を發表しているが、星野の英詩研究の蓄積と日本古典の深い造詣が、日本の現代詩のみならず短歌の世界に縦横無尽に切り込んでいる星野詩学にただ唾然とし、星野理解が中途半端なままで終わってしまった。これに対し、同号に寄稿した大島邦行氏の論考は星野詩学の核心をつかみ全貌を明らかにする明晰なものであった。大島氏の論考の助けを借りて、いま一度、第三章(Ⅲ)「詩

書批判」を考えてみたい<sup>④</sup>。

星野が『詩学』の月評を担当する際に、詩人としての「読み」の立ち位置を明確にするところからこの章は始まる。宗左近の戦死した友人、長谷川章二が引用するリラダンのことば「生きること、そいつは家来どもにまかせておけ」は、文脈がわからなければ神経を逆なでするであろう。大戦の戦闘を経験した世代にとって、「生きる」意味はどのようなものであったのだろうか。星野は続ける——〈生きることが困難な時代であって、なおかつ(リラダン流の)精神を維持することは、なおさら困難であったろう。なおさら困難なことを、充分承知の上で志向するところに、人間存在の高貴性がある〉。ここに、星野の、死と隣り合わせに生きた人に対する深い理解に共感を覚えずにはいられない。さらに、詩を本気書こうとする場合には、この精神への転位が必要であることを訴える。読み手によっては、胸元に匕首を突きつけられるような心持ちになるのではないだろうか。

星野は〈観念の体系の高み〉に到ること＝〈恍惚〉＝〈不幸〉と韜晦な等式で結ぶのだが、大島氏は当時の現代詩のトレンドを意識しながら、この等式を解きほぐす。

星野はここに〈栄光と悲惨の同時存在〉のポエジーをみる。そしてその生き方のポエジーを支えているのが〈人間存在の高貴性〉〈精神の貴族性〉〈貴族精神〉であるという。この大胆な言葉の選択は勇気のいることであつたらう。何かしら高踏的で高級な詩という趣が世俗から敬遠されそうだし、しかし日常から流離したような詩が生きる糧になるのかという批判を傍らに置いて、誤解を恐れず書き記す星野の果敢な精神そのものが高貴であるだろう。つまり詩は、ポエジーは、現実からの転位がなければ成り立たないということに、本気で詩を書こうとするとき、日常の平坦さをどこかで乗り越えていくものがなければならぬし、その乗り越えるべきエネルギーに転位する精神の働きを指して高貴性といったのだろうか<sup>⑤</sup>。

星野は、〈高貴性への転位〉の意味が誤解される予感があったのであろうか、それは一つの比喩であるので〈それを意識の純粹持続と言い換えてもよいし、あるいはもうすこし具体的に詩的緊張度の有無の問題〉と言い換える。さらに、こうしたことばの定義は概念のずれが徐々に生じ、最初の比喩が逆の概念を意味する比喩に転じてしまう危険性を孕んでいることさえも見通している。

「詩」が生まれる源として、〈高貴性への転位〉〈意識の純粹持続〉〈詩的緊張度の有無〉といった比喩で表現する精神の場に、星野氏は詩書を批評する根拠を置く。無論、感覚的であると同時に知的である精神、古今東西に渡る文学の深い教養、ことばの可能性を探る探究心などなど、星野の文学観を形成する全要素がこれを支える。そして経験を含め生涯を通じて感得、蓄積したもの、それらは、ある堅固で巨大な建造物を築くように、徹底的に踏み固められた土台に始まり、星野詩学の一層一層の地層を形成しているのだと思う。詩の本質を明らかにしようとする実に真摯な姿勢ということばが浮かんできたとき、ここでふと思い起こしたのは、ライオネル・トリリングの『〈誠実〉と〈ほんもの〉近代自我の確立と崩壊』である<sup>6)</sup>。ヨーロッパ十八世紀までの社会規範に則ろうとする良心——誠実さ——は、近代以降に世俗化し誠実さの中の不誠実、欺瞞的なものを帯びてしまう。美德であったものがその美德性を失う瞬間、近代の自我が生まれ、その自我は、その欺瞞性を暴露しながら〈ほんもの〉を志向する。〈ほんもの〉の原語は〈authenticity〉で、日本語の定義には「真正であること」「典拠のただしこと」「確実性、信憑性のおけること」とある。しかし現代にあっては、その〈ほんもの〉の在り所自体が曖昧なため、近代の自我自身も揺らいでしまうのである。トリリングの述べたことを断片的に思い出しながら、この論考を充分承知していたはずの星野は、おそらくは、方位の拡散する現代詩の状況に羅針盤を置くような心構えだったのではないだろうか。見据えた準準が、〈高貴性への転位〉〈意識の純粹持続〉〈詩的緊張度の有無〉という表現になったのではあるまいか。大島氏も語っている

ように、この表明は〈果敢な精神〉の表れであり、よほどの覚悟の末だったのではないかとも思う。

#### IV 詩とプロパガンダ

さらにもうひとつ。〈栄光と悲惨の同時共存〉を表現する例として、アイルランドの詩人 W・B・イエイツのことば「わたしたちは最後のロマン派だ」が引用され、アイルランドの自治権の獲得と拡大を目的とする復活祭蜂起、それに対して加えられた大英帝国側の徹底的弾圧＝〈生きることが困難な時代〉に生きた詩人イエイツに触れている。復活祭蜂起が起きた 1916 年をテーマに、イエイツは“Easter 1916”を書いている。この作品は、事件を想起させる象徴的な意味を持ち、現代においても、随所に引用されている。政治的、宗教的信条を異にする者でさえも、アイルランド現代史上、痛ましくも重要な意味を持つ復活祭蜂起を語る際に、この作品のことばの力を認めるようになってきた。

100 年前に起こった復活祭蜂起の顛末を簡単に述べると、アイルランドの自治法案が可決した直後に第一次大戦が勃発、当時のイギリスは施行を大戦終了後に見送るとしたことで、現在の北アイルランドを含む共和国としての独立を求めているアイルランド共和主義同盟、アイルランド義勇軍、アイルランド市民軍が首都ダブリンを中心に起こした武装蜂起である。この反乱は一週間以内にイギリス軍によって鎮圧され、その直後一週間の内に蜂起の首謀者 15 人が即刻処刑された。この処刑はアイルランドの人々に強烈な反イギリスの感情と愛国心を呼び起こす引き金となる。その後は、さらにアイルランド独立戦争、アイルランド内戦といった事態が続く。

イエイツはこの報に接し、深い哀しみと同時に怒りを表している。というのも、当初この武装蜂起が暴挙に思え、これまで積み上げられてきた努力が無に帰するかのような失望感を味わうと同時に、首謀者の中には親しかった知人も含まれていたからである。早速、彼は詩作に取りかかり、9 月には“Easter 1916”を完成させ、彼の友人た

ちのために 25 部限定の形で発表している。公に発表するのは、それから 4 年後のことである。イエイツ批判のひとつには、この作品を公にするのになぜ 4 年もかかったのか、イギリスに対する日和見の姿勢があったのではないかというものがあつた。この時点において明らかなのは、イエイツは、処刑された指導者たちを殉教者として祭り上げることに従えなかったということだ（実際、彼らを英雄として殉教者として描くのを期待されていた）。さらに付け加えれば、彼の詩劇『キャスリーン・ニ・ホーリハン』*Cathleen Ni Houlihan* (1904) の影響が、蜂起に多くの市民を駆り立てたのではないかという批判も囁かれていた。イエイツはことばに潜む正負の力をよく知っていたはずである。そして最も忌避していたことは、詩がプロパガンダに陥ってはならないということであった。

1916 年 4 月の復活祭蜂起が起きたとき、イエイツはロンドン、グレゴリー夫人 (Lady Isabella Augusta Gregory, 1852-1932) はクールパークにそれぞれいた。グレゴリー夫人の場合、鎮圧されるまでの 1 週間以上、新聞、郵便、電信は途絶え道路も封鎖され、ダブリンの様子や事件の詳細は、人伝えの伝聞を中心に不確かな情報に頼らざるを得なかった。日を追うごとに募る彼女の苛立ち、焦燥感日記に詳細に記録されている<sup>(7)</sup>。後年、グレゴリー夫人は、ゴールウェイ周辺の伝説や説話などを自らが聞き取り調査し収集した結果を 1 冊の著作にまとめている<sup>(8)</sup>。その中には、蜂起直後に流布したブロードサイドのバラッドが収められている。ブロードサイドシートは、周知の通りいわゆる瓦版であるが、その時々速報を伝える役目を果たしていた。そこに掲載されるバラッドはある種の宣伝効果を目的に巷で歌われ、ニュースとして庶民に広まる。その内容は必ずしも正確な情報を伝えるものではなかったが、公の記録には残されなかった事柄を検証する際に歴史的には貴重な資料となる。

グレゴリー夫人が記録に残したバラッドを一瞥すると、〈To head that band for aye will stand McDonough, Pearse and Clark./ We'll tell of Heuston, Plunkett; Kent and Connolly we'll

name:/ Whose names as heroes e'er will shine on Ireland's roll of fame./ McDermott, Mallin, Hanrahan, Daly, Corbet and McBride/ Are men who for our country's have fought nobly bled and died.〉(マクドナ、ピアース、クラークらを先頭に、ヒューストン、プランケット、ケント、コノリーらの名前を語ろう。彼らの名前は、英雄としてアイルランドの榮譽の巻物に加えられ、永久に輝きを放つであろう。そして我が国のために気高く戦い死んだマックダーモット、マリン、ハンラハン、ダリィ、コルベット、マクブライト) と犠牲者たちの名を明記し讃えている。さらに注意深く見ると、その内容は、「蜂起の指導者たちは、支配のくびきから私たちを解放するために果敢に戦い犠牲となったが、アイルランドの殉教者たちとともに、彼らを誇りとし自由を勝ち取るまで、たとえわが子の涙を流させようとも、男たちの血が再び流れざるを得ないであろう」といったもので、彼らの犠牲を悼みながらも、戦意高揚を煽るような急進的なメッセージが読み取れる。

As children of a suffering land we always  
look with pride

On those who for our country's cause have  
nobly fought and died;

.....

And now with those who thus repose we'll  
reckon all who bled

Our chains to break in Easter week, with  
Ireland's Martyred Dead.

.....

Then, brothers all, be proud of those who  
fell in Easter week,

Be yours the task upon their foes a vengeance  
dire to wreak;

Resolve to-day within your hearts, some day  
your faith to show,

When Freedom's slogan calls again to deal a  
gallant blow.

For the blood of men must flow again  
though orphans' tears are shod,

Till a nation free the shrine shall be of Ireland's Martyred Dead.

(“The Men of Easter Week”)

(苛まれる国土の子孫として、我々は誇りを持っていつも見守っている／祖国の大義のためにこれまで果敢に戦い倒れた者たちを／…／そして今こうして眠りにつく者たちを、我々は／復活祭に我々の枷を解こうとして血を流した者たちすべてをアイルランドの殉教者たちとして見なすであろう／…／さあ、同胞たちよ、復活祭に倒れた者たちを誇りに思おう／我々に課せられた仇敵に対する任務、もたらすべき復讐を自らのものとせよ／汝らの心中に、見せるべき信念を今このとき決せよ／自由のスローガンが勇ましい一撃を振るうように再び呼びかけたなら／というも、たとえ親を失った子供たちの涙が流されようとも、男たちの血は再び流されなければならぬのだ／自由を勝ち取るまで、さすれば、神殿はアイルランドの殉教者で築かれよう。)

これまでアイルランドのために犠牲になった数知れない「殉教者たち」に加えて、今回の蜂起でも犠牲の血が流されたわけだが、その犠牲はこれでは終わらないことをバラッドは示唆している。事実、蜂起に対して当初懐疑的であった市民は、処刑直後には彼らを殉教者としてとらえ、反英の大きな世論を形成してゆくこととなった。

これに対し、イエイツの作品は処刑された知人との出会いの回想から始まり、感情を抑えた静かな調子を保っている。彼らを匿名のままひとりひとりの佇まいや振る舞い、生前の姿を回顧する。

This man had kept a school  
And rode our wingèd horse;  
This other his helper and friend  
Was coming into his force;  
He might have won fame in the end,  
So sensitive his nature seemed,  
So daring and sweet his thought.  
This other man I had dreamed  
A drunken, vainglorious lout.

(この男は学校を経営したこともあり／そして私たちのペガサスを駆った。／彼を助け友人だったこちらの男は頭角を現し／最後は名声を勝ち得たかもしれなかった。／その本質はとても繊細に思えたし／その考えは勇敢でいて優しくかった。／もうひとりのこの男は、酔っぱらいの自惚れやだと／私は思っていた。)

プロパガンダのバラッドが、処刑された者たちを高らかに賛美するのに対し、イエイツの作品で言及されるのは、ピアース、マクドナ、コノリー、マクブライトの4人に絞られ、イエイツの目に映った生前の姿を簡潔に描いている。彼らはイエイツの知人であり、マクブライトを除いて親しい関係にあった者たちである。

アイルランドの将来に明るい兆しが見えてきたように思えた時に、全てを覆すような事態に詩人は逡巡を隠せない。この蜂起に対する必然性や妥当性を問い、彼らの犠牲に対する無念さを吐露する。これまで穏やかに流れてゆくように思えた時流は、彼らの投じた一石によって、逆流する暗い恐怖の予感となって彼を襲う。

The stone's in the midst of all.  
Too long a sacrifice  
Can make a stone of the heart.  
O when may it suffice?  
.....

What is it but nightfall?  
No, no, not night but death;  
Was it needless death after all?

(その石がすべての中心にある。／あまりにも長い犠牲が続くと／心から石が作られる／ああ、いつになったら心は満足するのだろうか？／…／黄昏だったのだろうか？／いや、そうではない、夜の闇ではなく死なのだ／結局のところ、無駄死にだったのではないのか?)

予想さえできなかった事態、それによって虚しく流された血の犠牲、犠牲者への悲嘆とともに愚行に対する怒りを滲ませる。そしてこの事態が引き

起こすだろう暗い将来の予感を通り一遍の詩句では表現できなかったと私は考える。犠牲を美德と見なす風潮、価値観の逆転、そして一挙に死に傾こうとする恐怖の予感がイエイツを捉えたのではないか。その結果〈All changed, changed utterly/ A terrible beauty is born.〉(すべてが、すべてが本当に変わってしまったのだ/恐ろしい美が生まれた)という衝撃的な詩句が生み出されたと言えよう。

このあまりに有名な詩句を例にして、星野の述べる〈栄光と悲惨の同時存在〉の意味を探ることができるように思える。星野は、優れた作品がいかに成立するかの説明をコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) のことばを借りて次のように説明している。

〈不信の自発的暫定的停止〉の状態を、読者の意識に引起こすことによると言ったが、〈不信〉とは、作者の思想信条に対する不信であることを考えれば、読者の側に受動的に生じるこの現象と類似の意識の現象が、作者が詩の制作に向かう際にも、おのれの思想信条の暫定的止揚という形で、そこから精神の高貴性への転位を成就しながら、同じく、しかし多分に能動的に起こるのではなからうか。作者のそのような意識のはたらきと読者のそれとが、作品を仲立ちとして、いわば回路がつながるとき、詩的感動の電流がながれるのであろうし、いわゆる伝達が成立する。伝達される感動、それは言うまでもなく、精神の高揚の状態であり、高貴性への転位の状態であることになる<sup>9)</sup>。

悲惨な結末を迎える蜂起と犠牲に対して悲嘆にくれる個人としてのイエイツ、蜂起の意味をどのように捉えてよいのか判断にまよう詩人イエイツ。愚行とも言える彼らの無謀な行為が英雄的行為として美化されてゆく瞬間、これまで築き上げたことが覆り、さらに血で血を洗うような事態が予測される禍々しい予感。イエイツ流の表現で言えば、愚者と賢者、醜と美、無秩序と秩序、負と正の対立概念が一転にして入れ替わる事実を目の前にし

たと言ってよからう。イエイツの精神の中で、筆舌に尽くしがたい状況=現実の「愚」を、星野のことばを借りると〈高貴性の転位〉に陥った末に、〈すべてが、すべてが本当に変わってしまったのだ/恐ろしい美が生まれた〉という象徴的な詩句に結晶させたと考えられないであろうか。そして、暗黒と狂気の力が支配する予感を伝えるこの2行に、私たちは戦慄する。

## V 〈理解できないところ〉へ導くことば

さて、ここで再び鷺田氏の〈理解できないところへ連れてってくれる言葉が大事〉という発言を思い出してみたい。プラトンは「魂の弱い部分、劣った部分に害をなす」として詩のことばの力を退けた。さらにニーチェの解釈は、理性=アポロ的なもの、情動=ディオニソス的なものに弁別し、詩を後者に属するものとした。詩は、ある啓示(インスピレーション)を受けて綴られるものであろうが、情動にまかせれば成立するというものではない。一時的感情の高ぶりは、瞬間的な感情の昂揚を伝えることができるかもしれないが、私たちの精神を新たな地平、異なる次元に導くことはないのではないかと私は考えている。

イエイツは、かつて自身の作品で〈I think it better that in times like these/ A poet's mouth be silent, for in truth/ We have no gift to set a statesman right;〉(このようなときには/詩人は沈黙している方がよい。事実/詩人は政治家を正せるような才能に恵まれていないから)と語っている。一読すると、詩人は現実に働きかけ力に乏しい無力な存在で、年寄りや子供の慰めにしかならないとへりくだっているのだが、おそらく、ここにプロパガンダ作者と詩人との境界線を引いているとも受け取れる。先述したように、『キャスリーン・ニ・ホーリハン』が市民を戦いに駆り立てたのではないかと批判された経験からも、自らの意図とは関係なく人心を動かしてしまう恐怖を知っていたはずである。さらに、政治の手段として利用される詩は、アイルランド文学に普遍性を与えるという自身の理想に反する。プロパガン

ダに語られる内容は、イエイツにとっては真実を伝えるものではないからである。それを裏付ける陽に、彼はグレゴリー夫人に蜂起後のダブリンの様子を次のように伝えている。

I was in Dublin a little later and I found everyone talking of the last moments of the executed men. Some of the fine things had been said and done but many were legends. Dublin cynicism had passed away and was inventing beautiful, instead of derisive, fables.

(私は少しして後にダブリンにいたのですが、誰もが処刑された者たちの最期の瞬間を語っていました。そこでは立派なせりふ、立派な行いをしたことが語り草になっていたのですが、その多くは言い伝えにすぎないのです。ダブリンの皮肉な見方は消え失せ、人々は嘲笑の代わりに美談を作り上げていたのです。)

と語るイエイツは、当初冷やかに蜂起を見ていた市民が処刑者たちまつわる様々な美談を作り上げる状況に戸惑いを隠せない。おそらく、彼の心を最も苛んだものは人々の変節する様であろう。「最後のロマン派」とかつて自身を形容したイエイツにとって、時々変わる世論の流れは思いがけないものではない。それよりも、まことしやかに伝えられる言説が事実として受け取られ、大衆を導いてしまう、そこから生まれる恐怖であったのではないか。その後さらに続く、アイルランドのみならずヨーロッパ全体は〈生きることが困難な時代〉を迎える。無秩序の混乱の兆しを感じ取り、禍々しい社会の動向を背景にして、2000年の眠りから目覚めた怪物〈A shape with lion body and the head of a man〉の誕生を、イエイツは“The Second Coming”に描くことになる。巨大な力が秩序を取り戻す「聖獣」なのか、破壊神なのかも明言せずに終わる作品は、2001年9月11日、ニューヨークの同時多発テロが起きたとき、21世紀の社会を予感させるもの、そして警鐘を鳴らすものとして広く知られた。

現代詩は難解とされ「よくわからない」という理由から、現代では未読のまま書架に眠っている作品が多い。ある意図を持って書かれたプロパガンダのような詩は一読すればその意図が理解できるわかり易さを備えているが、そのわかり易さによってどこに導こうというのだろうか。先に引用した鷺田氏との対談の最後に高橋氏がこのように締めくくっている。

中2の冬、うどん屋で突然友だちが吉本隆明さんの詩集を出して、朗読してくれたんです。僕は1行も理解できなかった。でも感動して泣きたくなった。理解はできなくても、感じることはできる。そしてそれはとても大切なことだと思います。

#### イエイツ作品のテキスト

*The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* (Macmillan, 1989)

#### 《注》

- (1) 「言語 無限の読み方 折々のことば」朝日新聞 文化・文芸 (2016年1月29日13版)
- (2) 『ひらめきと、ときめきと』(あきは書館, 2015年)
- (3) 星野徹：茨城大学名誉教授、研究書には『詩論と批評』(沖積舎, 1980), 『車輪と車軸』(沖積舎, 1981), 『現代イギリス詩賞書』(沖積舎, 1995) その他多数、翻訳書には『洪水伝説』(国文社, 1973), 『古代の芸術と祭祀』(法政大学出版局, 1974), 『イーディス・シットウェル詩集』(思潮社, 1993) その他多数、詩書には『芭蕉四十一篇』(笠間書院, 1976) 『玄猿』(第13回日本詩人クラブ賞受賞 沖積舎, 1979), 『楽器または』(思潮社, 2002), 現代詩文庫『星野徹詩集』(思潮社, 2007) その他多数。
- (4) 星野徹, III 詩書批判『薔薇水その他』(国文社, 2014年)
- (5) 大島邦行「白亜紀」143号(白亜紀の会, 2015年) 53頁
- (6) ライオネル・トリリング、野島秀勝訳『〈誠実〉と〈ほんもの〉』(法政大学出版局, 1989年)。
- (7) Lady Gregory, *Seventy Years* (Colin Smythe, 1973) pp. 532-549.
- (8) Lady Gregory, *The Kiltartan Poetry, History & Wonder Books* (Colin Smythe, 1971)
- (9) 星野徹, 136-137頁

The Force and Potential of Language:  
The Boundary between Poetry and Propagandistic Writing  
— in the Case of W. B. Yeats's "Easter 1916"  
and a Ballade in a Broadside Sheet —

Kunie EBISAWA

**Abstract**

In order to cope with globalizing society English education in Japan has been focusing for a long time much upon how to improve sufficiently the skills of English learners. Various teaching methods have been introduced, invented, and tried. Some of them may be noteworthy, but it is difficult to judge which method is most effective. In fact, many of them are still being examined.

In the course of these enthusiastic trials by many educators, it seems that more and more learners have come to feel afraid of using the language, or what is much worse, it seems that the learners have begun to lose interest in learning it, despite understanding that English skills are necessary. This discouraging tendency is contradictory to our educational aim. Too much emphasis upon practical usage of language might cause their passive attitude toward language learning. Recently, I have come to strongly feel that it is necessary to teach an attractive quality of sound and some profound functions of language in addition to providing different ways of thinking.

This paper argues that poetry would be effective and appreciated even in educational fields because it has a certain function which may restore interest in language. Poetry has been criticized for its lack of logical thoughts, clarity, and practicality. On the contrary, poetry provides a variety of potential: images, association, multiple definitions of words, rhetoric, and melodious/musical sound. There should be, however, a definite deference between poetry to be appreciated and propaganda writing. By contrasting Yeats's poem with propaganda writing, I reveal potential strong points in poetry in language expression. I conclude that some of poems in both Japanese and English could be appreciated in order to stimulate learners' feelings and allow them to perceive the quality and beauty of language.